

筑波大学審査学位論文(博士)

論文題目：

児童・生徒の未来展望と学校適応の関連性

—— 一般校と支援室の子どもの比較——

人間総合科学研究科心理学専攻

氏名：陳 晶晶

【博士論文予約】

本論文では、未来展望を「未来へのポジティブとネガティブの両側面を併せ持つ感情・態度」と定義し、児童・生徒の未来展望の発達についての心理学的理解を深めること、また、一般世帯の子どものみならず、貧困家庭の子どもも研究対象に加え、彼らの未来展望と学校適応の関連性を解明することを研究目的とする。

研究 1 では、児童の未来への楽しみなことと心配なことについて調査を行い、そこで収集した自由記述の内容の中から、未来展望の概念的構造を把握した。研究 2 では、研究 1 の分析結果に基づき、児童・生徒用の未来展望尺度の開発を行い、尺度の信頼性と基準関連妥当性について検証を行った。児童・生徒の未来展望尺度は、最終的に「未来自分への信頼」「未来への心配」「未来社会への信頼」との 3 つの因子から構成されることになった。

研究 3 では、児童・生徒の未来展望尺度を使用し、小学校高学年から中学校までの子どもの未来展望の発達の变化について、縦断調査と横断調査で検討を行った。その結果、小学校高学年から中学校にかけて、自分の未来へのポジティブな展望を表す「未来自分への信頼」は、子どもの置かれた具体的な状況によって常に変動することが明らかになった。また、未来全般へのネガティブな展望を表す「未来への心配」は、調査した学年において大きな変動が示されなかった。社会の未来へのポジティブな展望を表す「未来社会へ信頼」は、発達に伴い減退していく傾向が示された。

研究 4 から研究 6 までにおいて、一般校の児童・生徒を調査対象にし、彼らの未来展望と学校適応(学校適応感・学習意欲・精神的健康)との関連について、2 つの分析方法の基に検討を行った。1 つの分析方法として、未来展望の 3 つの下位尺度が学校適応において果たす独自の機能を明らかにするために、階層線形モデルを用いて、未来展望の 3 つの下位尺度と学校適応との関連について、個人レベルと学級レベルを併せて検討を行った。学級レベルの関連についての検討結果から、自分の未来に対して、学級全体が楽観的な雰囲気であれば、その学級に所属する子ども達が、良好な対人関係を保ち、また高い学習意欲を持つことが明らかになった。また、未来に対して、学級全体が悲観的な雰囲気であれば、その学級に所属する子ども達が友だちとの関係において低い適応感を示し、また低い学習意欲や精神的健康を示すことが明らかになった。なお、社会の未来に対して、学級全体の雰囲気が楽観的であれば、その学級に所属する子ども達が、高い精神的健康を保つが、友だちとの関係において低い適応感を示すことが明らかになった。

一方、個人レベルの関連についての検討結果から、未来自分への信頼は、先生との関係での適応感や、学業場面での適応感、学習意欲、精神的健康のいずれに対しても促進的作用を示し、学校適応において重要な役割を果たすことが明らかになった。また、未来への心配は、友だちとの関係での適応感、学業場面での適応感、精神的健康に対して抑制的作用を示したが、先生との関係での適応感及び学習意欲に対して促進的作用を示したこととして、学校適応の側面によって、異なる影響を及ぼすことが明らかになった。なお、未来

社会への信頼は、子ども達の学校での友人関係や先生との関係での適応感を促進し、また精神的健康を高めることが明らかになった。

未来展望と学校適応の関連性について第 2 の分析方法として、未来へのポジティブ・ネガティブな感情・態度の 2 次元の組み合わせで得られる異なる展望タイプと学校適応との関連について検討を行った。未来へのポジティブ・ネガティブな感情・態度を 1 次元の両端にあるものとして捉えた従来の研究では、子どもの未来への展望がポジティブであるか、またはネガティブであるかしかないと想定された。それに対し、本論文では、未来へのポジティブまたネガティブな感情・態度をそれぞれ独自の次元で捉えるため、子どもの未来への感情・態度の在り方に、ポジティブな展望タイプまたはネガティブな展望タイプだけでなく、ポジティブ・ネガティブの両方とも高いタイプ、またその両方とも低いタイプも存在することを想定し、クラスター分析でそれらの存在を確認した。

その分析結果において、ポジティブな展望次元の得点が高く、ネガティブな展望次元の得点が低いことを特徴とする「楽観群」は、いずれの学校適応変数においても最も高い得点を示し、また、ポジティブな展望次元の得点が低く、ネガティブな展望次元の得点が高いことを特徴とする「悲観群」は、いずれの学校適応の変数においても最も低い得点を示した。この 2 つは、従来未来へのポジティブ・ネガティブな感情・態度の 1 次元的な捉え方のもとに想定された展望タイプに対応し、学校適応との検討結果においても、従来の知見、いわゆる未来展望がポジティブであるほど、発達的に良いとの見方を支持することになる。その一方で、楽観群と悲観群以外の展望タイプと学校適応との関連の検討を通じて、新たな知見も得られた。具体的に、未来自分への信頼と未来への心配が共に高いことを特徴とする「対自高関心群」は、高い学習意欲を示したことより、未来へのポジティブまたネガティブな感情・態度を併せ持つことも重要な意義があることが明らかになった。また、未来展望の 3 つの下位尺度とも低いことを特徴とする「低関心群」は、低い学校適応感と学習意欲を示したことより、教育現場で、未来に高い心配を抱える子どものみならず、未来にあまり関心を示さない子どもをも支援対象とする必要性が示唆された。

研究 7 と研究 8 では、貧困家庭の子どもを対象として学習支援室に通う子どもの特性を把握したうえで(研究 7)、支援室の子どもの未来展望と学校適応感(研究 7)・学習意欲(研究 8)との関連について検討を行い、その結果を、研究 4 と研究 5 での一般校での調査結果と比較検討した。その結果、未来展望について、一般校の子どもに比べ、支援室の子どもは未来自分への信頼や未来社会への信頼がより高く(研究 7)、未来への心配がより低いこと(研究 8)が示された。

また、未来展望と学校適応感・学習意欲との関連についての比較検討の結果、一般校において、子どもの未来への心配は、友だちとの関係での適応感や学業場面での適応感、精神的健康と負の関連を、先生との関係での適応感と学習意欲と正の関連を示したことより、子どもの学校適応において重要な役割を果たすことが示された。それに対し、支援室において、子どもの未来への心配がいずれの適応変数とも有意な関連が示されなかった(研究 8)。

一般校の子どもと比べ、支援室の子どもの未来への心配が有意に低いとの結果(研究 8)を考慮に入れ、支援室の子どもが未来にそもそも心配を抱えていないため、彼らの未来への心配と学校適応変数との間に明確な関連が見られなかった可能性が考えられる。その一方、一般校の分析結果から、未来への心配が、子どもの先生との関係構築や学業課題への取り組みにおいて促進的機能を持つことが示されたため、従来貧困家庭の子どもにおいて多く見られた学校不適応の問題は、彼らの未来への心配の低さに関連する可能性が示唆された。

心配自体は問題への対処であることが指摘され、支援室の子ども達が未来に低い心配を抱えたのは、彼らが未来に予想される困難に対処しようしない可能性が考えられる。この仮説は、研究 9 での支援室の子どもの未来展望についての事例分析の結果で裏付けられた。事例分析において、支援室の子ども達は、自分の未来を考えたときに、そこで立ちほだかる経済的問題また学力的問題に気づかされ、未来への心配に陥らないよう、これらの問題と向き合うのを回避していることが見られた。